

すくみ足（FOG）の病態を深化する試み

1)公益財団法人脳血管研究所附属美原記念病院神経難病リハビリテーション科

谷川浩平

歩けるのに歩けない。パーキンソン病（PD）などでみられる FOG は、歩行に必要な下肢運動は保たれているにも関わらず、状況によって足底が床にはりつき足を振り出せなくなる現象である。FOG は転倒の引き金となることから症状改善のニーズならびに病態機序の解明への期待は高い。近年、PD における運動制御に対する認知の動員増加による問題が着目され、この観点からの FOG の解明が進んでいる（Peterson ら、2016）。

提示する症例は H&Y 分類IV、MMSE22 点、FAB 12 点と重度のパーキンソンニズムに認知機能、遂行機能の低下があり、歩行開始時、方向転換時、目標物接近時に FOG が生じていたパーキンソン病認知症（PDD）例である。

本例は後方に傾いた立位姿勢を、垂直と誤認識する自己の意図と意識下の運動準備との解離に加え、転倒恐怖感による情動的な情報処理過多から「どのように足を出したら良いか分からない」と訴え FOG を示した。一方で、ライトタ

ッチや歩数予測では FOG の軽減が見られていたことから、姿勢の誤認識を修正することで認知機能が低下した本例の歩行中の認知的負荷を軽減し、FOG の改善を図った取り組みを紹介する。

本シンポジウムでは遂行機能の低下を主体とした認知機能低下を有する PDD 例の FOG の検討により、FOG の認知的側面の問題と関連要因を整理し病態の深化を試みたい。